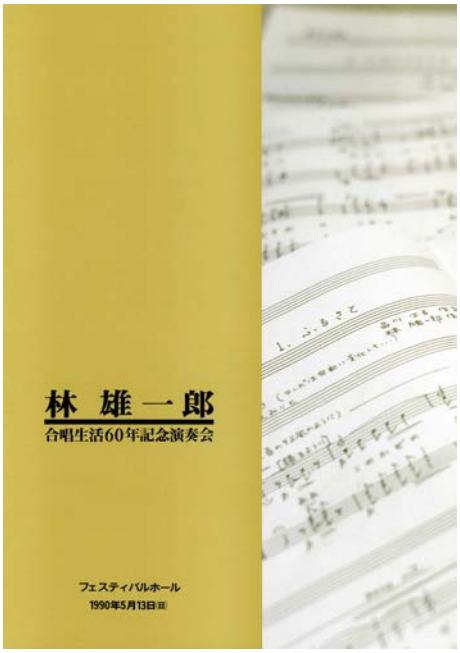
林雄一郎合唱生活60周年演奏会【1990 年（平成 2 年）5 月 13 日】

フェスティバルホール



17．新　月　会

男声合唱組曲
「雪明りの路」

春を待つ
梅ちゃん
月夜を歩く
白い障子
夜まわり
雪　夜

作　詩／伊藤　　整
作　曲／多田　武彦
指　揮／亀井清一郎

作曲家
多田　武彦

林雄一郎先生から教えられたひとつの大切なこと

このすばらしい合唱音楽の世界に、私を導いてくださった多くのかたがたのなかで、私が20才台前半に特にご薫陶を賜ったのは、林雄一郎先生と、故清水脩先生のお二方である。

清水先生からは、合唱音楽の作曲における「詩と音楽との関り合い」や「選ぶべき詩の重み」について教わった。後40年近く、私はこの教えを頑ななまでに守りつづけている。

林先生からは、「ア・カペラの合唱音楽の演奏に関する重要事項」を、あるときは直接に、あるときは関学グリーや新月会の演奏を通じて、ご教示いただいた。

一つの出来ごとをお話しすると、それは私が京大在学当時、京大男声合唱団の指揮をしていた頃のことである。

昭和26年秋の関西合唱コンクールで、京大男声は「ピエロ」を歌って史上初の二位に入った。翌年は趣きを変えて宗教音楽を歌ったところ、三位に転落した。このとき林先生は私に、次のことを話された。

「ピエロのような曲ならともかく、宗教音楽を歌うときは、パートごとに、メンバーは隣の人の声を聴きながら歌うことが大切、さもないと、パート内のピッチが合わないし、ハーモニーも崩れてしまう。コーラスをする人はともかく、隣の人よりうまく歌おうと思う気持が先に立って、隣の人の声と合わす努力がされない。これでは合唱音楽が根底から崩れてしまうし、ハートも人に伝わらない。」

今、考えてみると、このことは、すべての演奏に通じる。この音の統一性があってこそ、これと対照的な演奏がより一層引き立つ。この示唆は、その後の私の創作活動にも、各演奏家の演奏の分析にも、限りなく役立った。

林雄一郎先生。合唱生活60年誠におめでとうございます。毎年先生から頂くお年賀状の清新な墨痕のように、いつお会いしても、先生の清廉なお人柄と秘められた音楽への情熱に心を打たれます。これからもますますお元気で、「流麗な曲想の三拍目に時折見られる先生のあの両腕をすっと右下の方向に張られる印象的な指揮ぶり」を、いつまでも私たちに見せてください。